

### 1 自己評価及び第三者評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	2890100304		
法人名	協同の苑		
事業所名	六甲アイランド グループホーム		
所在地	兵庫県神戸市東灘区向洋町中3-2-2		
自己評価作成日	令和 5年 11月 6日	評価結果市町村受理日	令和6年 1月4日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.wam.go.jp/">www.wam.go.jp/</a>
----------	----------------------------------------------------

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	認定NPO法人コミュニティー・サポートセンター神戸(CS神戸)		
所在地	兵庫県神戸市東灘区住吉東町5-2-2 ビュータワー住吉館104		
訪問調査日	令和 5年 11月28日		

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

協同の苑の基本理念	1. 心豊かで幸せな暮らしのお手伝い。
2. 安心して年をとることのできるまちづくりのお手伝い。	3. 優しさと思いやりを持ったひとのお手伝い
自立支援	1. ゲストの思いや気持ちに寄り添い、その人らしい生活を家族とともに支援します。
2. 「若い」「障害」「個性」を理解し、ゲストの力を引き出す支援をします。	
3. ゲストが自己選択・自己決定・自己実現できる生活を支援します。	

**【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

コロナ禍でも、児童との交流やチューリップ祭への参加に加え、去年は認知症サポーター養成講座、今年も認知症カフェを開催するなど、徐々に地域交流を復活させている。昨年家族アンケートを実施し、その要望に応えた。またコロナ禍で面会できないため毎月写真と担当者の手紙で入居者の様子を家族に知らせ喜ばれている。週に1回は入居者と一緒に作る調理の日を設け、月に1回のリクエストメニューや誕生日メニューで入居者の希望をかなえるなど、食の楽しみも大切にしている。協力医療機関と連携して看取りに取組み、開設以来亡くなった方の殆どは事業所で看取られている。入浴の時間帯を午後に移し、午前中は身体を動かし入居前に近い生活パターンを試行したり、「最期までトイレでの排泄に拘り対応します」など利用者主体の考えが職員に浸透している。
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および第三者評価結果

協同の苑六甲アイランドグループホーム

評価機関:CS神戸

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	協同の苑の理念を基に、グループホームの認知症ケアの指針を作りました。利用者が主体的の生活が出来る様に支援の方法を模索しています。	「自立支援」を基に、職員が話し合っ、入居者への寄添い、認知症の理解と尊重、主体的生活の支援等を柱とする3箇条からなる「認知症ケアの指針」を2020年に作った。委員会やプロジェクトを通じて指針の共有と実践に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	チューリップ祭り、バラ園に毎年参加しています。グループホーム建物の横に畑があり、地域の方が散歩中に声をかけて下さり、育て方を教えて下さることが地域との交流の機会です。	コロナ禍で地域との付き合いは自粛していたが、2年前に学童保育の児童との交流やチューリップ祭りへの参加を行った。去年は高校での認知症サポーター養成講座を実施、今年には認知症カフェを事業所主体で開催するなど、徐々に交流活動を復活させている。	認知症カフェを事業所主催に替えて開催したり、感染状況等を見極めつつ地域との交流活動を徐々に復活させていますが、引き続き取組まれることを期待します。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	10月よりグループホーム主催の認知症カフェを開催しています。月1回開催を継続する予定です。年末、クリスマスにサンタに変装した職員と利用者で保育園、学童保育へ菓子のプレゼントを渡しに回っています。去年は職員が地域の高校へ認知症サポーター養成講座をしました。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	家族代表の方にも参加してもらい開催しています。特に意見や改善の提案はありません。唯一、コロナ5類になり面会や外出の緩和との指摘、世間と介護施設の対応へに温度差と高齢者を守るべきと相反する意見がありました。感染状況を見て柔軟な対応を行っています。	運営推進会議は出席が定められたメンバーを揃え、隣接・併設の複数事業所が合同で開催している。コロナ禍では中止して書面開催とし、2年前からオンライン開催としていたが、今年3月からは対面開催に戻している。議事録は玄関で閲覧できる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	神戸市との連絡はメールでやり取りが基本。大きく何かを相談することはありませんでした。重大事故報告や、規定のことで意見を仰いだりすることはありません。	市役所とは事故報告や感染症の発生時などに、適宜メールや電話で連絡を取っている。地域包括支援センターは運営推進会議のメンバーで同じ建物内にあることもあって、顔の見える関係で様々な情報交換や相談・協力をし、日常的に連携をしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束委員会にて2ヶ月に1度会議を行っています。会議や研修での意見をまとめた周知徹底を行っています。今年度はスピーチロックについても研修を実施しました。	年2回の研修を行ない、身体拘束委員会を年4回から6回に増やして、拘束のないケアの実践に努めている。玄関とユニットの入口は基本的に開放している。家族の了承も得てセンサーマットを使っている方が5人いるが、毎月必要性を検証している。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止委員会を発足し定期的に会議を行い、不適切なケアの有無、報告などを題材に話し合いをしています。また、職員には年に2回セルフチェック、虐待研修を受けてもらっています。	虐待防止の研修及び不適切ケアを自己チェックする職員アンケートを年2回実施し、事故対策委員会で2ヶ月に1回虐待についての話し合いを行っている。職員の心の健康に配慮し、ストレスをセルフチェックして医師との面談に繋げる仕組みも設けている。		
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	昨年度は後見人制度についての研修を実施しました。また現在4名の方が後見人制度を利用されています。現場職員も積極的に後見人との連携をとるようにしています。	昨年は管理者が権利擁護の制度に関する研修を外部で受けて、事業所内で伝達研修を行った。入居者の3人が入居前から、1人は入居後に、弁護士や司法書士の成年後見人が付いているほか、現在家族が成年後見制度利用を相談中の方が1人いる。	権利擁護に関する制度を利用する入居者は増えています。今後は専門家による研修も実施して、制度とその適用について職員の理解を深めていけることを期待します。	
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は特別な場合を除き、入所前までに住んでいた空間を見に行かせてもらい、利用者とも面談を行うようにしています。入所後1～2週間は家族にご様子を随時連絡をし不安や思いを確認させてもらっています。解約時はここ3年間は看取り介護での解約です。	契約に関する説明はなるべく本人も同席で行うようにしている。全てを契約時に説明する場合は重要文書を読み上げるなどして1時間以上かけている。終末期には常時の医療処置が必要なければ看取りをさせて頂きたいと、事業所の側から申し出ている。		
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	第三者評価のアンケート以外に昨年は施設独自で作成した、ご家族様アンケートを実施しました。その返信内容を基に改善できることは改善し、職員にも周知しました。ご家族の意見を外部に出すことは運営推進会議の場だけです。	家族の意見や要望は来所時やメール・電話等で伺っているが、コロナ禍で直接伺う機会が減った。昨年12月に事業所独自で家族へのアンケートを実施し、そこで出た要望に基づいて、ユニット入口にアクリルボードを設置して対面での面会を実現した。		
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員はそれぞれ委員会やプロジェクトメンバーに入り、支援に対しての意見など出し合い改善をする場を設けています。特に利用者の誕生日会に関しては昼食のメニューの作り方食材選びは現場職員の意向に沿っている。また、行事企画はほとんど職員の企画通り実施しています。	職員の意見は会議や、食事・事故対策・排泄・認知症等をテーマとする各種の委員会・プロジェクトで活発に出され、行事企画や食事メニュー等さまざまな所に取入れている。今年は敬老祭への家族参加が企画されたが、感染症発生の為実現できなかった。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	1年に1度、予算達成や部門計画を遂行できた部門に関して理事長より表彰制度があります。人事評価制度を導入しており、個人目標を立て半年に1回上位者と面談し、高評価者はボーナスに反映します。誕生日休暇、正職員には年に1回6連休の休暇が取れる仕組みがあります			

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13			○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新入職者、中途入職研修を実施しています。キャリアアップ体制として積極的に実務者研修や資格取得を目指せる仕組みがあります。外部研修への参加許可もあり1～2名認知症実践者研修へ参加しました。		
14			○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者を神戸市の認知症介護実践者研修講師として参加を許可し、積極的に活動しています。また講師仲間とも連携しています。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>						
15			○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前にはできる限りご自宅へ訪問、お部屋を参考に施設内の環境を整えています。入所後は1週間24時間観察シートを作り様子を細目に記入する仕組みがあり、その為対象者と自然に密に関わり時間が作れます。また不安や要望を聞き、その都度、職員間で支援の方法を検討するようにしています。生活歴シートも作成し職員に周知をします。		
16			○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前にご自宅へ事前訪問や時間を作りご家族からご要望をお聞きします。その内容は後日資料にまとめ職員に周知しています。入所後1ヶ月間は面会は自由とし家族との時間をもける用になっています。また、入所初日のご様子は次の日に連絡する仕組みになっています。		
17			○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	上記同様。入所前の訪問でご家族様に要望をお聞きし面談記録及びケアプランを作成しています。		
18			○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護度が平均3.0と高い中ですが、調理を一緒に行う、できる方には家事を一緒に行う時間を作るようにしています。		
19			○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ここ3年間は面会自粛で家族と会うこともままならない環境でした。その中でもweb面会、時間制限での面会を継続しました。現在は衣類や他必要物品についてはご家族に準備を依頼する。、居室内での面会も可能にし、家族参加型の行事も企画しました。先日半年間の看取り介護を家族とともにを行い、10月末に家族に看取られ施設で永眠されました。		
20	(11)		○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入所者を検討する中で、六甲アイランドに馴染みのある方を優先に入所を検討しています。地域へ散歩に出かけ、馴染みの方と出会うこともあります。コロナ禍で積極的な行動は行えていません。	入居者が家族に年賀状を書いて出すことを以前から支援し続けている。感染防止のため面会が出来ない期間が長く続いたので、毎月写真と手紙をメール等で家族に送り様子を知らせるようにした。月1回来る訪問理美容師は新しい馴染みの関係になっている。	入居者の写真に担当者の手紙を添えたメールは家族に好評だったとのことですので、感染の収束後も、毎月ではなくとも定期的に送られることを期待します。

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21			○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日中はリビングで過ごすことが多く、一人で過ごす時間はほとんどありません。認知症の症状をうまく利用し関係性が悪化しているときは少し距離をおくことで修復できるので、適宜対応しています。どうしても相性が合わない利用者同士については一定の距離をもつように支援しています。		
22			○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	グループホームでの看取りを積極的に実施しており、最期は家族にも積極的に介護に参加してもらいます。四十九日までに利用者との施設での思い出をアルバムしてご家族にお送りしています。また、先日3年前に施設を退所されたご利用者のご家族より介護のご相談をいただきました。別のご家族はボランティアとして活動して下さっています。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>						
23	(12)		○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入所前になるべく自宅に伺いどんな生活を送っていたのかを把握し、馴染みのものを持参いただくようにしています。現在新入所の方は在宅時にどの介護サービスでも入浴拒否があり入浴サービスを受けたことはありません。自宅の自慢のお風呂に入ることが習慣、人に裸を見せたくないなどの思いがあることを理解して無理に入浴せず、環境になれること信頼関係を築くことから始めています。	入居前には、出来る限り自宅を訪問し、どのように暮らす事が最良なのか本人・家族と面談を行い、把握に努めている。入居後は、本人の生活を詳細に把握する”24時間観察シート”を一週間分作成し、入居者の思いや意向を把握した支援に繋げている。	
24			○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の自宅訪問し生活歴と馴染みの暮らしをお聞きしています。特にこれという習慣は施設でも継続することに職員も違和感がありません。朝食はヨーグルトとバナナ、夜に漢方を服用する。夜はテレビを付けっぱなしにしてほしいなど。		
25			○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	24時間シートを活用し、VS測定・排泄・夜間等の状態を記録しています。また、随時レクリエーションや外出等活動時の様子を記録し、現状把握に努めています。		
26	(13)		○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的に担当者会議を開催し、本人や家族の意向を確認した上で、事前に行ったユニットメンバーへの聞き取りを基に情報共有、意見交換を行い、ケアプランに反映しています。	定期的開催される”3か月毎の担当者会議”や”6か月毎の介護計画見直し”のタイミングに拘らず、普段のかかわりの中で”気づいた事”があれば業務日誌に報告しそれを職員全員で意見交換し、タイムリーな支援ができるよう心がけている。	
27			○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	24時間シートや活動時等の記録をヘルパー全員が確認するよう徹底し、情報共有を行っている。その場に応じたケアが出来るよう工夫し、記録に残しています。それらの情報をもとに介護計画の見直し日々の支援の見直しを随時行っています。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28			○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ前はよく面会に来られていたご主人が体調不良で寝たきりになり、先日「母を父に合わせたい」というご家族の希望をお聞きし車いすのご利用者をお連れしご自宅までいきました。また、家族で卒寿のお祝い外出、母が好きだった六甲牧場、孫の誕生日会、ご主人の葬儀参列などご提案があればお手伝いさせていただきます。		
29			○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近くのスーパーへ調理の日、誕生日会の食材の買い出し、ベイシエラトンホテル内のお店のパン屋、ケーキ屋さん、アンパン、誕生日ケーキを毎月購入させてもらっています。受診で施設職員が送迎できない場合が家族及び介護タクシーを利用しています。		
30	(14)		○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	内科医、精神科医、歯科医と提携し、定期的な往診の機会を設けている。往診で分からないことは専門医へ受診しています。ご家族には往診時の内容は変更ある時は適宜報告しています。	ほとんどの方が入居前に医療体制の説明を受けて、提携先の内科医をかかりつけ医に選り月2回往診を受けている。精神科医、歯科医の往診もある。家族同伴が原則の他科受診では必要な場合職員も同行し、普段の生活等を家族に代わって説明している。	
31			○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療関係は主に主治医に相談をしています。すぐに連絡が取れる体制です。医療的ケアについて看護師と連携し適切な処置、支援を実施しています。特に感染症が発症した際は看護師の指示の元、感染症対応を実施しています。		
32	(15)		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	昨年は入院者延べ5名でした。どの方も入院時にご家族と施設職員が付き添い施設としての意向を医師に直接お伝えします。退院前は医療ワーカーと施設職員、ご家族と連携を密に対応しました。病院で永眠された方以外4名は施設へ退院ができました。	入院時には、職員が家族に付き添い”介護記録”に基づき利用者の普段の生活状況を説明している。退院時は、医療機関窓口と職員が直接連絡を取り合い、受け入れ後の生活での注意事項など家族と供に情報共有しながら退院支援を行っている。	
33	(16)		○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期の指針の説明と意向確認書を全入所者ご家族に確認をしています。また、終末期が近づいたご家族には主治医、介護士、ご家族とカンファレンスを行い、方向性の話し合いをしています。現在1名看取りケアを実践中です。10月末には1名ご家族に見守られ施設で永眠されました。ここ5年間の退所者は9割は施設で看取りをさせていただきました。	契約時に”重要事項説明”のひとつとして「看取りケアに関する指針」を説明し同意を得ている。そして実際、重度化した場合には、本人や家族の意向を踏まえ、看取りの希望があれば協力医、看護師と随時連絡を取りながらチーム支援に取り組んでいる。	
34			○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎年緊急時の対応研修を実施しています。事故対策委員会を発足し、介護事故・受診を伴う事故について原因と対策、今後同じ事故が起きないように対策を検討し周知しています。		



自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域包括、デイサービス利用者と一緒に消防訓練を年2回実施しています。今年6月には非常食の試食も行いました。	消防訓練は併設の地域包括支援センター、デイサービスと協同で6月、11月に実施した。停電を想定した訓練では、照明がないと真っ暗でトイレも使えないことが分かった。火災以外の災害対策が今回はできていない。食料・水の備蓄は3日分ある。	大災害時の危機的状況でも重要な業務が継続できるBCP(事業継続計画)の策定、停電時のトイレ使用や屋内移動などの課題に今後取り組まれることを期待します。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>						
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入職時に接遇マニュアルを配布し、言葉遣いは敬語を使用する。プライバシーについても毎年研修を実施しています。特に言葉遣いは崩れやすい職業であることから、職員間でも注意喚気を行っています。	コロナ以前は研修を年1回実施していたが、現状は、実践の中で、上司、同僚がお互いに、具体的事例で指摘、指導しあっている。例えばトイレの声掛けは、お風呂に行く時、立ち上がった時などのタイミングを見計らってさりげなく行うなどである。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	誕生日には何が食べたいか、誕生日ケーキも利用者一人ひとりに選んでもらっています。認知症のある方は入浴拒否がある方が多いが、無理せず今がダメならあとで、今日がダメなら明日とご本人のペースに合わせるようにしています。着たい衣類の選択なども自己決定できる方はしてもらう仕組みができています。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員のペースになりがちな職員もいますが、その都度ルールを作り、利用者主体で行うように仕組みを変えています。例)以前アンケートでご指摘があった就寝時間は20時⇒21時に変えて職員の意識改革を行っています。あくまで利用者主体の生活を送りを目標にしています。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご本人の持ってこられた衣類や髪留め等利用し、その人らしい身だしなみができるよう配慮しています。また、昔から使用していた化粧水を家族に購入してもらい持参して頂いています。			
40	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	週1回調理の日を設け利用者と共に調理してもらっています。誕生日会メニューや月1回のリクエストメニューは利用者との会話より出てきた意見をもとにメニューを立案し食事を提供しています。日々の食事の準備への参加はできていません。下膳や食器洗い、テーブル、お盆拭きをしていただいています。	コロナ禍でも週1回は入居者と一緒に作る調理の日を設け、誕生日会、月に1回のリクエストメニュー、たこ焼き、ケーキ作りなど、食のイベントを工夫しながら続けている。最近はお茶店の訪問、量販店等での食材調達なども徐々に復活している。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々に合わせたカロリー調整や個々の状態に合わせて形態変更を行い、おいしく、楽しく食べていただける環境を作っています。食事・水分のチェックシートを活用し、1日の摂取量の把握をしています。入所時にアレルギーや嗜好の確認、食習慣の聞き取りを行い、個別対応を行っています。			

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42			○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを実施し、チェック表にて記録しています。また、月1回、歯科医往診、歯科衛生士のブラッシング指導を受けています。		
43	(20)		○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄委員会で排泄の自立を目指し、排泄パターンはもちろん、入所されている方は全員布パンツを使用してもらい、極力おむつ、パットを使用しない期間を長くする工夫、最期までトイレでの排泄にこだわり対応しています。	排泄の自立を目指し、2年前から全員布パンツを使用し、パットは使うが極力、紙おむつやリハビリパンツを使用しない工夫を続けている。また排泄委員会は薬に頼らない自然排便を指向し、食事と運動の関係を見直すなど排泄全般の自立に取り組んでいる。	
44			○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄委員会の中で、自然排便が出るように食事と運動量に目を向けて、食物繊維の多い寒天ゼリー、混ぜご飯を作り提供、運動する機会を作るなど工夫をしています。薬に頼らず自然排便ができることを目指しています。		
45	(21)		○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴の曜日は決めていますが、体調やご本人の意向に合わせて時間や曜日を随時変更しています。	生活パターンを入居前に近いものにするため、昨年からは午前中は太陽の光を浴びて活動し、午後は入浴、夕食後、就寝に入るという形に取り組んでいる。それに伴って、入浴時間も午前中だったものが、午後2時からを試行している。	
46			○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入所時に生活歴を聞く中に生活習慣、生活リズムを聞くようになっています。グループホームに入所後年齢を重ねることによって休息の必要性、就寝時間、起床時間も変化します。その人にあつた生活習慣を柔軟に考え対応しています。また安眠を促すため、自宅で使用していた布団や枕の持参や音楽をかけるなど個々に対応しています。		
47			○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師と薬剤師と連携し、服薬後の状況を確認しています。		
48			○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	季節を感じられるよう、時期に合わせた行事、食事やお菓子メニューを利用者・職員で決定し調理を行う機会を設けています。また日々の洗濯たたみ、食事の片付け、散歩、音楽レクリエーション、書き物など日々の生活の中で好きなこと得意なことをして過ごす時間を設けています。		



自己	者第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩の日を決めて、週に1回は外に出る機会を作っています。ご家族面会も散歩面会も積極的にお願いをしています。コロナも5類になり、今年は秋の恒例、遠足を企画し、喫茶外出、電車に乗って買い物など実施しました。	2年前から散歩・外気浴・音楽など曜日ごとに種目を定めた「週間レクスケジュール」を作り、週2回は外出している。その他、喫茶外出、電車で買い物、食料買い出し、チューリップ公園、バラ公園の散策など外出範囲を広げている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入所時にお財布を持参し人は本人に管理をお願いしていますが、介護度も高くなり自身で管理が難しいのが現状です。買い物に出掛けときは施設で立て替えし後に回収しています。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の希望があればお掛けし、LINEの通話アプリを使用しテレビ電話などでも対応しています。また毎年年賀状を家族に出すようにしています。そのためにも文字を書き続けられるように文字を書く練習時間を設けています。		
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	刺激となるような色は使用していない。清潔な場所で過ごしてもらう為、清掃を行い、季節を感じられる制作物や外出時の写真を飾り、居心地のよい空間となるよう努めています。	浴室、トイレなど共用空間は段差なく広く手すりがついている。また利用者が一番長い時間を過ごすリビングは清掃が行き届き季節の飾り物、観葉植物が設えてある。本、カセット、CDも利用することが出来て、居心地の良い交流の場となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	余暇の時間をご自身の落ち着いた場所で過ごしてもらう為、特定の席を決めずに自身の好きな席に座ったり、自室で過ごせるよう配慮しています。		
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	持ち込み可能にしており、日ごろより使用していた椅子や机、仏壇やご自身の絵などを飾られています。	居室には洋服ダンスとチェスト、ベッド、洗面台が備え付けてあり、学童保育の児童が贈ってくれた手作りカレンダーが飾られている。入居者は座卓や椅子、家族写真やぬいぐるみなど好みの物を持ち込み、居心地の良い快適な空間を作り上げている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トレイの場所を絵で表示したり、入居前に事前に家を訪問し環境が変わらないようにレイアウトを考えてたりしています。カレンダーやホワイトボードを使用して今日のスケジュールを書き目に見て確認できるようにしています。またユニット間の行き来は自由で日中はどちらで過ごして良いという風土があります。		